

# 開発途上国の環境問題を題材とした 中・高等学校向け環境教育プログラムの開発 — JICA 青年海外協力隊の経験を生かして —

学籍番号 2717 氏名 中西美帆  
指導教員 川島宗継教授・市川智史助教授

## 1. はじめに

持続可能な社会の実現をめざす環境教育において、開発途上国の環境問題に関する理解を培うことや、地球的規模の視点に立った価値観を育成することは重要である。青年海外協力隊経験者は、こうした教育課題に対応する上で有益な人材である。しかし、協力隊経験者自身が、帰国後に教育プログラムを開発している例はあまり見られない。

本研究では、筆者の協力隊の経験を生かし、開発途上国の環境問題を題材とした環境教育プログラムの開発・実践を行うと共に、それを通して今後の協力隊員に対して、プログラム開発の視点から留意すべき点について、提案を行った。

## 2. プログラムの作成

筆者の青年海外協力隊の経験から、〈価値観の多様性と他者との共生〉〈衛生問題とまちづくり〉の2つのプログラムを作成した。

### プログラム1：〈価値観の多様性と他者との共生〉

ねらい：①自分の価値観に気づくとともに、価値観の多様性を理解する。

②異文化、異なる価値観や意見を持った他者とのかかわりの中で、共生していくためには、どのような能力・態度・姿勢が必要かを学ぶ。

学習内容・意図	学習活動
自分の価値観に気付く。	活動①：「タンザニアの価値観シート」を記入する。
タンザニアの実状を知る。 開発途上国に興味をもつ。	活動②：パワーポイント・スライドショーを視聴する。
価値観や意見の多様性を知り、他者と共に考える。協調性を育てる。	活動③：ダイヤモンドランキングの手法を用い、途上国の発展に必要なキーワードをランキングする。
各グループの考えを共有する。	グループ発表
グループワークをふりかえる。	活動④：グループワークの反省や気付きのまとめ
価値観・意見の異なる人との共生に必要な姿勢や態度について考える。	活動⑤：1回目のグループワークをふまえて、話し合いを行う。
各グループの考えを共有する。	グループ発表
途上国の問題を自分の問題としてとらえる。	講義

### プログラム2：〈衛生問題とまちづくり〉

ねらい：①タンザニアを例として、まちづくりへの参加の仕方を体験的に学ぶ。

②途上国支援のあり方や意味を学び、今後自分が、どのようにかかわりを持っていけばよいか考えさせる。

学習内容・意図	学習活動
途上国の様子を知る。途上国に興味をもつ。	活動①：タンザニアの現状を理解する。
途上国の衛生問題について学ぶ。	活動②：タンザニアの現状をふまえ、まちの衛生設備を配置する。
各グループの考えを共有する。	グループ発表
途上国と日本のまちづくりについて学ぶ。 途上国の援助のあり方について考える。	活動③：各グループの結果をつなげ、まちとしての課題に気付く。まちづくりのあり方や参加の仕方について学ぶ。
途上国の問題を自分の問題としてとらえる。	講義

### 3. 試行実践

〈価値観の多様性と他者との共生〉は、北嵯峨高等学校2年生5クラス、計185人を対象に、〈衛生問題とまちづくり〉は、京都外大西高等学校2年生32人を対象に試行実践を行った。実践後のアンケートの結果を以下に示す。

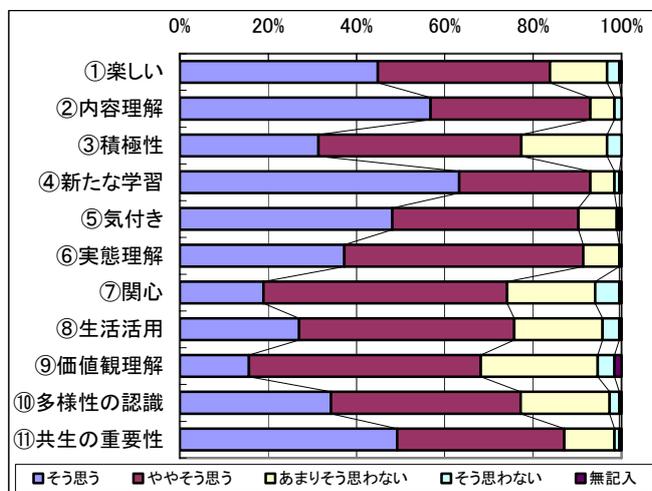


図1 価値観の多様性と他者との共生アンケート結果

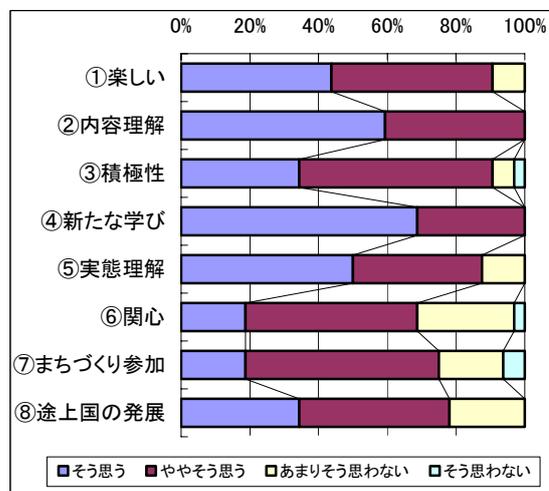


図2 衛生問題とまちづくりアンケート結果

〈価値観の多様性と他者との共生〉の実践結果では、楽しく学習する、新しいことについて学ぶという点については高い達成率であったが、グループワークから身につけてもらおうとした「自分の価値観に気付く」「価値観の多様性の認識」「他者との共生のために重要なこと」については、7割程度の達成率であった。この理由として、グループワークが話し合い中心で作業的な学習活動がなかったことや、学習者のグループワークへの関わりの度合い（参加の程度）が低かったことが挙げられる。

従って、グループワークの積極性を高め、話し合いを活性化させる工夫が求められる。

〈衛生問題とまちづくり〉の実践結果では、楽しく学習する、新しいことについて学ぶという点については高い達成率であったが、「途上国の環境問題に関心を持つ」「まちづくりへの参加の仕方学ぶ」「途上国発展のために、何が必要なのか考えさせる」については、7割程度の達成率であった。また、開発途上国のまちづくりと、日本におけるまちづくりについての話を関連づけて行ったが、まちづくりに参加した経験のない学習者にとって、あまり理解につながらなかったようである。

従って、まちづくりに参加した経験のない学習者がまちづくりを自分の生活課題としてとらえる工夫が求められる。

### 4. 考察

本研究で開発した〈価値観の多様性と他者との共生〉および〈衛生問題とまちづくり〉の2つのプログラムは、多少の改善や補足説明は必要なものの、すべてのアンケート項目において7割程度の達成率があることや、自由記述において、ねらいを満たす記述の多いことから、中・高等学校の学校教育において、利用することが可能であると言える。

今後の協力隊員への提案としては、今後 JICA による出前講座はもちろん、学校教育の現場において、体験談やゲストスピーカーとしての活躍が期待され、要望も高まっていることから、派遣前から課題意識を持ち、帰国後を見通した活動を行うことも必要でなのではないか。さらに、総合的な学習の時間などと結びつけ、ねらいを明確にしたプログラムの開発を行っていければ、より良い教育ができるだろう。

また、協力隊経験者の作成したプログラムのデータバンクを作成し、プログラムを改善していくことも有用なのではないだろうか。